平成 28 年度 第１回観察会 吉野山観察会　記録

日　時	平成 28 年 5 月 14 日　7：30～17：30　　快晴
観察地	奈良県吉野郡川上村　吉野山林業地を中心に
講　師	吉野山林業地にて　（谷林業）谷 茂則氏　前田 駿介氏、（清光林業）岡橋 清元氏 森本氏　森と水の源流館＝木村全邦氏　マイ箸作り＝辰田製作所　辰田 敬美氏 クリーンエナジー奈良・吉野発電所　伊藤 佑一氏
テーマ	日本の林業再生の道
備　考	参加者数　３２名＋スタッフ４名（田中 克先生、渡邊啓子、藤田益栄、飯田正恒） 計３６名　　記録　飯田

１．吉野山林業地

清光林業会長・岡橋清元氏は千早赤坂村の林業家・大橋慶三郎氏から温暖化などの異常気象にも対応できる「壊れない道づくり」の技術を習得し、吉野山で路網の整備と機械化を進めて木材コストを低減、林業が生業として成り立つ大きな成果を収めてこられた。今回、吉野林業地を岡橋氏達の案内で植林地と路網を見学した。（右写真：林業地道路）

４ＷＤに分乗して現地に向かうと、路網は急峻な地にヘアピンカーブの連続。この道を木材を積んだ２トン車が走行しても崩れない構造とのこと。その施工法や経済性について、岡橋氏と谷林業の前田さんから説明を受ける。路網は車で走行でき、山の見回りから丸太の搬出などを合理的に行える。短期的には施工費など大きな出費となるが、長期的にみると山の維持管理がし易くなり経費が低く抑えられるとのこと。

この山には樹齢３００年を経たヒノキやスギが多くありこのお陰で経営出来ているが、戦後植林した樹齢６０～７０年の木しかない山では厳しい状況とのこと。

ヒノキの樹林の下には灌木のガクウツギや、テンナンショウの群落、マツカゼソウなど、いずれもシカが食べない植物が皮肉にも地表を保護する植物になっていた。

ベテランの岡橋氏につづく若い谷さんや前田さん達の健闘を祈りつつ下山した。

２．森と水の源流館

水を育む豊かな森を始め、自然の持つ美しさや楽しさ、不思議を体感する施設として地域でおおいに活用されているようで、展示をじっくりと見学したかったが、小学生の見学とかちあい、かけ足での見学となったのが残念であった。（右は展示解説中の木村全邦さん）

３．マイ箸作り体験

吉野で各種の箸を製造販売している辰田製作所・辰田敬美（よしみ）氏に吉野の高級建築素材の桧で作られたまだ面取りをしていない状態の箸をサンドペーパーで磨き電熱ペンで名前や、イラストなどを焼き付けて仕上げるマイ箸作りを体験、貴重な体験になると同時に今後割り箸の産地を意識して吉野産を極力使用し、わずかであっても吉野林業の再生に貢献できればと思ったことである。（左写真：電気ペンで書入中）

４．クリーンエナジー奈良・吉野発電所

間伐材などを燃料にする「クリーンエナジー奈良・吉野発電所」を見学した。同社は２０１３年に設立、総事業費約３８億円を投じたという。木質バイオマスによる発電所は奈良県では初めてで、間伐材の活用による森林保全なども目指すという。

発電所は出力６５００キロワットで、大淀、吉野両町の世帯数より多い約１万２千世帯分を供給できる。燃料は間伐材などの未利用木材が５０％を占め、製材する際に出る端材やダム流木なども使う。木材はチップにして燃やし、蒸気タービンを回して発電する。月６０００トンのチップを使用。電力は日常的に売電し、地震など災害時に用いる電気自動車の充電装置も設置する。

従業員１５人は新規に雇用した。 吉野地域は全国有数の林業地だが、木材価格の低迷で間伐されない植林地が増え、森林の荒廃が懸念されているが間伐材などを発電所が購入することで、森林の手入れが進み、水源涵養、山地保全などの波及効果も期待される一方、燃料の安定供給のためにも林道の整備が課題という。

発電所の発展はすなはち吉野山林業の再生につながるものであり、その発展を願いつつ帰路についた。

発電所の概要説明を聞く参加者の皆さん

発電設備を見学

以上